

【要旨】 松下憲一 中国の歴史書と“正史”の論理

本講演では、私が専門としている北魏史を研究するうえで欠かせない史料である『魏書』を取り上げ、そこに込められた正史の論理を紹介するとともに、正史の論理を打破する方法として、同時代史料である碑文や墓誌の有用性を具体例をもとに解説しました。

北齊の魏収が書いた『魏書』は、北魏の歴史書として唯一現存するものです。従って『魏書』は北魏史研究の最も基本的な史料です。しかしそこには当然ながら北齊の魏収という撰者による視点が介在しています。北齊は北魏の孝文帝による漢化路線を継承する王朝ですので、孝文帝を賛美すると同時に、中華王朝としての北魏の姿が前面に押し出されています。

その一方で、北魏の遊牧王朝としての側面は極力削除されているのです。そのことを端的に示す事例として、北魏皇帝のもう一つの君主号である可汗（可寒）が『魏書』には登場しません。太武帝の太平真君四年（443年）の「嘎仙洞碑文」には「皇祖先可寒」と自分たちの祖先が可寒（可汗）であるとはっきり書かれています。そしてこの碑文と同じ内容が『魏書』礼志にも掲載されているのですが、この部分は削除されています。

このように魏収『魏書』は、ある意図をもって書かれているのです。これが正史の論理です。それを見破り、北魏の実態に迫るためには、同時代史料である碑文や墓誌などを丹念に調査して、『魏書』と比較検討することが重要です。